

まで以上の差別と挫折感をもたらすものとなっています。

以上の状況を踏まえて、それではどうするかですが、教育科学研究会は1991年8月の大会で「自由と協同を地域と学校から」をスローガンに掲げましたが、まさに協同の立場からの解決が迫られていると思います。私学の立場の解決としては、私学経営の安定と競争原理の止揚を、どのように進めていくかが大きな課題です。そのためにも、財政の面と教育内容の両面からみる必要がありますし、教師集団や父母・地域との連帯のあり方や

生徒自身の成長過程における協同のあり方まで踏み込まなければならないと思います。また、個別には、競争意識を越えた協同の思想の発展やそれを個人の生活レベルまで貫く人生観の確立など、生徒の進路指導、企業社会の論理にとらわれない将来の生き方にわたる方向性も明らかにする必要性を感じています。企業における熾烈な競争主義が学校現場にまで押し寄せ、学校や生徒まで巻き込んで来ているだけに、それを押し返し克服する協同の思想と、その実践が今日ほど迫られている時期はないと痛感している次第です。

<会員のひろば>

子どもたちを社会の主人公に

宮崎 充治（東京都／桐朋小学校教員）

〈生産に関する決定を握る能力と制度を〉

地球汚染が深刻化している。先進国の大量生産・大量消費型の「豊かな」暮らし、一方で第三世界は、それを支えるために資源の収奪や搾取を受けている。このような一方での極度の富と他方での貧困の進行、これが現代社会を特徴づけている。

環境汚染や核兵器、これらは人間が生み出したものだ。また、現在の経済システムもまた、我々が生み出したものだ。今、人間が、自ら作り出した生産力をどう制御するのか問われている。経済学者の置塩信雄氏は、「生産に関する決定をだれが握るかはその社会の基本的な構造を決める」としている。だれが生産に関する決定をするのかということが、民主主義にとっての重大な課題である。その際に、情報をだれが占有するのか、情報処理能力を持っているのか否かが生産決定の際に重要なこととなる。日本においては、情報処理能力の獲得によって、労働者が生産決定に介入する客観的条件が作りだされている。しかし実際は、その決定は少数のもの（＝独占資本）が独占し、前述のような事態が起こっている。

生産に関する決定から排除されるということ

は、何のために富を蓄積していくのか、人間の発達にとって、何が必要な「もの」（制度や時間も含めて）なのかということ主体的に問う過程から排除されていくということである。その結果、「モノ」（金や商品、サービス）にだけ耽溺していく心理が我々の内面に生まれ、自治的統治能力は衰えていく。

そのような事態が教育の諸矛盾の根本にある。子どもたちは、生産の現場から遠ざけられ、生産の決定を協同で担う力をつけられるのではなく、どのように少数者の立場に近づくかという敵対的競争になげこまれ、そして、生産物である商品を中心に消費するかという消費者としてのみの状況におかれる。そして、「目前のめあてで一喜一憂の心理状態、すすんで何を求めてよいかわからない」という、「めあてのない欲求不満の状態」（大田堯氏）にさせられているのだ。

子どもたちが、社会の主人公となっていく過程は、我々が労働の主人公となっていく過程と同じである。情報処理能力を獲得すること、生産を人間発達のために奉仕させるような感性を高めること、生産決定への自治的統治能力を高めること、それらを通じて全面発達をしていくことである。

〈子どもたちが直面して いる問題を授業化する〉

教育実践においては、子どもが今知りたいと願っている、なんとかしたいと願っている課題を取り上げることが重要な問題なのだと考える。

例えば、小学校6年生を対象に「子どもの権利条約の授業を創る」という実践を行った。子どもの権利という視点から、子ども自身が世界で起きていることを見直すということを意図した実践である。

その中でタイの児童労働について扱った。タイは児童労働が世界一多い国だ。子どもたちにタイの子どもたちの労働の過酷さをはなした。そして、①その労働の生産物を我々が安い金で手にしていること、②タイの児童労働の原因の一つに日本等の企業がダンピング競争をし、それが児童労働という形でタイに現れていること、③タイの児童労働の理由として、そもそも自給経済が成り立っていたタイの農村部に日本の電化製品等が持ち込まれ、購買意欲をあおられて現金支出が増えたことにあること、などを学んだ。

子どもたちはこんな感想を書いている。「今、私がこの学校へお父さんたちがかせいだお金できて、タイなどの森の木をたくさん切ってつくったノート等をつかって勉強しているが、これは他の国の(タイ等)人々が私達のお父さんが作ったものを借金してまでかっているからと思った。」

「先生の話の聞いている時、ふとまわりを見てみたらノートや、ふくや、くぎやトケイなどをふだんべんりだなーとつかっているけど、そのかげで苦しんでる人や、泣いてる人がいることにきづいた。」

「けっきょくは日本がタイの子ども達を出稼ぎにださせている。」

「タイの子たちが作った、やきとりや洋服を日本の同じ年頃の子たちが食べたり、着たり、買ったりしている。同じ年でも、身分がちがって、日本の子がえらいよう。むこうの人は、ろくにごはんもたべ

られないのに、日本の子はぜいたくすぎる。」

私たちは知らず、知らずのうちに構造的な経済暴力ともいえる体制に巻き込まれている。子どもたちは、ふだん何気なく、使っているものの背後にそのような人間の生活があることを知った。この後、世界の子どもたちの写真集を見て、住宅やゆとり、家族という面から日本の豊かさを問うたり、「日本は豊かか」というディスカッションを行った。

そして、「この体制をなくすと今の生活ができなくなるからどうしよう」「日本の企業も少し考えればいい」などの感想がでてくる。これは、実は生産決定の過程へと自らの身をおきはじめてことではないだろうか。「モノ」の背後にある人々の暮らし、環境、人種などの情報を知ることによって、これまでの生産関係を考え直していく。生産力をどうにかしていけばいいのかを子どもたちに考え始めるのだ。

高学年になると、あらゆる授業の場面で「今の社会はこんな課題を抱えているんだ。それを解決するために先生たち大人もがんばるけど、君達も次にはがんばってほしい。そのために勉強するんだ」と呼びかける。

さて、社会の主人公となっていくには、子どもたちを知識・認識の枠に閉じ込めてはならない。共感する能力、技能、内面化した態度も含めて育てていかななくてはならない。

タイの子どもの実態を知ることから始まって、それがどのように自分に関係しているのかという認識、それを自分のこととしてとらえていく共感能力、それを他人と交流していくためのディスカッションの力……。それらを通じて形成される自分の意見。授業は、このような力をつけるために予想をしたり、調査をしたり、討論をしたりというように組み立てられる。

先に述べた「日本は豊かか」という討論では、環境の観点(自然があるかどうか、自然破壊をしているかどうか)ゆとりの観点(子どもの自殺が多い、受験勉強がきびしい)といった観点から討論がおこった。クラス二手に分かれての討論だ。

討論の最中に意見が変わったら、席の移動をしていいということにした。席の移動があったり、同意見の仲間への声援があったり、自分で言い尽くせないことを友達に頼んだりしている。ふだんの友達関係を越えての討論が生まれるのである。

受験学力の暗記だけでなく、主権者としての知的な能力を全面的に育てる。これは子どもだけでなく、私たち自身の課題なのだと思う。

〈教育内容・制度を貫いて〉

「子どもを社会の主人公にする」ということを

私のすすめる、この1冊

大津和子 著

国際理解教育

国土社刊 2200円

著者の大津和子さんは「一本のバナナから」という実践で知られる高校の現代社会の先生である（現在は北海道教育大の助教授）。「一本のバナナから」という実践は、教室に持ち込まれた一本のバナナから、バナナのプランテーション農業の実態に迫り、そこで働く労働者の姿を知って、日本とフィリピンの関係、さらには南北問題の一面を考えていくという実践である。

この「国際理解教育」という本には、『地球市民を育てる授業と構想』という副題がつけられている。これは、「一本のバナナから」のその後の実践とその実践を支える理論の書である。

編集部より

＝安藤政武氏へのお見舞＝

昨年末、安藤政武氏（協同総合研究所常任理事、内外流通調査会代表）が心不全により意識不明の状態です。東京板橋の帝京大学病院に入院されました。現在も安静状態です。一刻も早いご回復をお祈りします。お見舞などのお問合せは次の所へ。

- ・安藤氏自宅 〒173 板橋区加賀2-3-1-213
- ・奥さん 節子さんの勤務先
芽ばえ社 ☎03-3910-3605
- ・内外流通調査会 外谷富二男 ☎03-3579-7851

考えたときに、教育内容・教育制度・教育運動等、全てにおいてこの理念が貫徹されることが必要なのだと思う。ところが、今の体制の下では公立学校は硬直化し、私立学校は「市場原理」の誘惑を絶えず受ける。それに抗するだけの教育運動、協同組合的精神に満ちた学校運営の組織形態を生み出していく必要を感じている。それは私たち自身が仕事の主人公となっていくことの追求なのだろうと思う。紙数が尽きた。このことはまた別の機会に考えてみたい。

「一本のー」の実践が教師のみのフィールドワークであり、学習者は動いていないという反省に立ち、この本の実践では実に様々な方法ーゲーム・シュミレーション・ロールプレイ・調査などを使って生徒自身が動いている。その背景には「地球市民を育てる教育は、地球社会の責任ある市民として生活していくために必要な知識理解だけではなく、技能習得や態度形成をも目標としている。……学習者自身の主体的な活動を通じてこそ、技能習得・態度形成の実現が可能だからである」という著者の認識がある。

教師だけでなく、運動の組織者は、ぜひこの本を読んでほしい。学習会を開く時に、話を聞いておしまいというケースが多いと思う。この本には、もっとおもしろい学習形態のヒントがまつまっているからである。（宮崎充治）

＝『協同の発見』発行遅れのお詫び＝

所報の発行が、昨秋以来おくれまして大変申し訳ありませんでした。今号の発行より月1回、15日発行送付のペースを守っていきます。次号11号（2月）は法制問題の特集に組みますが、以降は特集にこだわらず機動性をもたせて発行していきたいと考えています。

編集部（担当：手島繁一、佐藤弘子）より原稿のお願いがまいましたら、ご執筆よろしくお願ひいたします。